火の河

（上）

大林

火の河 上

大林 清

東京文藝社

火の河（上）
四二〇円

昭和三十八年十一月二十五日印刷
昭和三十八年十一月三十日発行
著作者　大林　清
発行者　角谷奈良雄
発行所　株式会社東京文藝社
東京都新宿区払方町一
振替・東京二一七五七
電話・(二KO)二五五〇

火の河（上）

目次

冬の嵐　五
黒い波　一五
人は裁かず　二七
同じ星の下　三九
戯恋　五〇
たのみの綱　六一
無色透明　七六
対決　八八
愛する　一〇三
密雲　一一三
玉の輿　一三三
伊豆の冬　一四七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

敵　一五七
恐喝　一六九
汚れた情事　一八五
変な奴　一九五
告白　二〇八
悪の素顔　二一八
からくり　二三一
銀座の蝶　二四三
灰色の道　二五四
つまずいた初夜　二六四
悪縁　二八八
黄金の船　三〇〇

冬の嵐

東京の師走は空っ風が名物の季節だが、今年は十二月の声を聞いてから、気味のわるいほどおだやかな暖い日がつづいている。

今日はそれでも、昭和通の高村建設の屋上には、いくらか冷たい風が吹いていて、昼休みのリクリエーションに出て来た若い社員たちの首をすくめさせた。

秘書課の山路里津子もその一人だった。風のあたらない陽だまりへ身を寄せて、男女入り乱れてのバレー・ボールの練習などながめていた。

そこへ階段口からまっすぐ、顔だけは知っている営業の若い社員が、屋上を突っ切って来た。

「検察庁の家宅捜査で、いま経理がやられている。何か事件が起ったらしいよ」

同僚の顔を見つけると、その相手にだけでなく周囲の者にも聞かせるたかぶった調子で言った。

「検事が乗り込んで来たのか」

「四五人来て部屋にいた連中はみんな外へ出された」

「何だ、汚職か?」

「何だかよくわからないが、そんなことじゃないかな」

営業の社員と彼を中心に忽ち群がった者たちの間に、そんな問答がかわされた。気の早い者はそれを小耳に狭んだだけで、階段口の方へ走り出した。

里津子は経理と聞いた途端に胸がさわいだ。主任になったばかりの小金井一宏が、事件の渦中に捲き込まれたらどうしようと思ったのだ。屋上の陽の色までが、急に褪せたように見えた。

噂がそれからそれへと屋上に波紋をひろげているのをあとにして、里津子も階段を下りる仲間に加わった。

経理課は二階にあって、そこへ下りる途中の廊下にも、何となくただならぬ気配がみなぎっていたが、二階の廊下は噂を聞いてつめかけた社員たちで混雑していた。

里津子はその中に小金井一宏の硬張った表情の顔を発見した。

そばへ行って立つと、一宏はふりむいたが、どこかちがうところを見ているようなうつろな眼をしていた。

「何がはじまったの?」

「何だかわからない。検察庁から調べに来ているんだ」

一宏は経理課の戸口へ視線をもどした。

そのドアはぴったりと閉められ、何者の入室も冷たく拒んでいるように見えた。

常に利権の海を泳いでいるような建設関係の仕事に、贈収賄のからんだヤミ取引はつきものである。小さな不正を一々取りあげていたらきりがないが、検察庁の捜査が社内で行なわれるような事件にぶつかったのは、里津子も入社以来はじめてだった。

だが、一宏に直接の関係さえなければ、里津子は高見の見物でいられた。

午休みが終って、里津子が事務室へもどると、そこでも経理課が捜査された話で持ち切りだった。事件の内容を正確に知っている者はなかった。

「上の方じゃわかっていたんだな。その証拠には重役連中今朝から誰も来ていないじゃないか。社長だって姿を見せないしさ」

「案外もう検察庁へ引張られてるんじゃないのか」

「ともかく明日の朝刊が楽しみだよ」

プロ野球のシーズンに野球の話に花を咲かせる調子で、男の社員たちは好き勝手な取沙汰をしていた。

女の社員たちは野球にも興味がないように、汚職にも関心は薄いが、それでいて何となく仕事が手につかない様子だった。

何事によらず早耳で、大げさに吹聴する癖のある黒田が、何か情報を掴んだ顔で部屋へ入って来た。

「おい、えらいこっちゃ」

黒田は課長不在とみてとると、はたしてそう前置きを振った。

「新東海道線の贈賄だってさ」

「ほんとうか」

どうせまたいいかげんな与太を飛ばすのだろうと思っていた者までが、一応耳をそばだてた。

「まちがいない、絶対確実な筋からの情報なんだ。相当な事件になるらしいよ」
「そうか、新東海道線ねえ……」
そのあとがざわざわと各人各説になった。
新東海道線建設にからむ汚職は、既に何件か各地で起っている。その尨大な部分の工事を請負っている高村建設が、同種の事件に捲き込まれるのはいかにもありそうなことだった。
「これはここだけの話だから誰にも言わないでくれよ」
黒田が仰々しく声をひそめて、隣のデスクの同僚にだけ言った。そのもう一つ隣にいる里津子には辛うじて聞えたが、里津子はそしらぬ顔で執務していた。
「経理の小金井主任な、あの男がどうも事件の鍵を握っているらしいんだ」
里津子は息の根をとめられた気がした。
「引張られたのか」
相手は首をさしのべてきいた。
「いやまだ引張られちゃいない。あいつ要領のいい男だから、そう簡単に尻尾は出さないだろう。しかし或る程度内情を知っている連中の間じゃもっぱらの評判なんだ」
「主任に抜擢されたんで嫉まれてるんじゃないのか」
「それもあるが、それだけじゃなさそうだよ。だまっててくれよこれは」
黒田は里津子にも聞かせるように終りを言った。
里津子はいても立ってもいられなくなった。小金井との交際も婚約も、まだ社内では誰一人知る者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

がない。日頃里津子に変な素振りを見せる黒田だが、あてつけに小金井の名を出したとは思えなかった。

会社の帰りに里津子と小金井の待合せる場所はきまっていた。

二人とも通勤に国電を利用しているので、会社から東京駅八重洲口まであるいて乗るのだが、その駅前を鍛治橋の方へ行った小さな喫茶店が、二人の落ちあう場所だった。

そこから馬場先門へ出て、皇居前へ抜けることもあれば、丸の内をあるくこともあり、時には有楽町附近で映画を観ることもある。この半年あまりの間、ほとんど毎日帰りに一緒になるのだが、まだ一度も会社の者に見つかったことはない。

里津子はその小さな喫茶店で、もう一時間近く待っていた。

会社の贈賄事件の鍵を小金井が握っていると聞いて、胸を痛めている矢先なので、小金井の身辺にも当局の追求が及んだのではないかと、里津子は気もそぞろだった。

恰度一時間がたった時、硝子扉のむこうに小金井が立った。扉を半分ほどあけて中をのぞいたのは、里津子が帰ってしまったかもしれないと思ったからだろう。

里津子は手をあげて見せた。

「ごめんごめん、仕事にひっかかっていたものだから……」

小金井はどこも変ったところのない笑顔で近づいた。

「心配したわ、来ないのかと思って」

「電話をかけようかと思ったんだが、そのひまもなくってね。車を飛ばして来たんだよ」
「やっぱりあの事件の影響?」
「うん、まアね……」
小金井はその話題を好まない顔をした。
「うちの課でもいろんな噂でたいへんだったわ。新東海道線に関係があるんですって?」
里津子がみつめると、小金井の顔色が微妙に動いた。
「そういう噂だが、僕らにはわからないよ。検事だってくだらない書類ばかり押収して行ってるんだ。どっちにしてもたいしたことないだろう」
黒田の話に小金井の名が出たのはどう言う訳なのかと、真偽をたしかめたい言葉が、つい里津子の喉もとまで出かけたが、さすがにそれはおさえた。
「今日は久しぶりで少しゆっくり遊ぼうか」
小金井が調子を変えて言った。
「ええ、どこへ行くの?」
「まずめしを食って、それからどこかへ行こう」
「映画?」
「映画もいいが、今日はもっとゆっくり出来るところがいいな」
小金井の言うのがどんなところなのか、里津子には見当もつかなかった。
喫茶店を出ると、小金井は丸の内仲通から有楽町へ抜ける散歩コースをえらび、いつも入るレスト

ランで食事をし、めずらしくビールを飲んだ。

小金井はゆっくり遊ぼうと言っておきながら、渋谷から玉電に乗る里津子を、渋谷までバスで送って来た。

だが、小金井はそこでは別れなかった。

「道玄坂の上に、学校の先輩に一度行ってみろと言われている家があるんだ。そこへ寄ってもう少しビールでも飲んで行こう」

そう言って里津子が乗せられたタクシーは、道玄坂をあがりきってしばらく行ったところで「丘の上ホテル」とネオン看板の出ている下でとまった。

「はじめてだから勝手がわからないんだが、ともかく入ってみよう」

玄関とも思えないような入口が、横手の人目のつかない場所にあって、そこを入って行くと、小金井が何も言わないのに、女中が案内に立った。

迷路のようなせまい通路をいくつも折れて行って、女中ははなれの玄関を入った。

手の混んだ作りの小部屋に、卓や鏡台や茶箪笥と言った家具が詰めこまれ、浴室や便所もついていて、次の間もあるらしかった。

いくら里津子が世間知らずでも、この部屋を一瞥しただけで、小金井の不純な目的に気づかずにはいなかった。

「あたしこんな家いやだわ、帰りましょう」

女中が出て行くのを待ちかねて、里津子は卓の前から言った。
「そうだね、ちょっといて帰ろう」
小金井はさからわなかったが、座を立ちもしなかった。
里津子は玄関へ出て、靴が二足ともなくなっているのに気づいた。
「あら、履物がないわ」
「へえ、おかしいね」
「持って行ったのかしら?」
「そうかもしれないよ。こんな作りだと食い逃げしようと思えばいくらだって出来るからね」
そう言われればそうだった。
里津子はしかたなくもとの場所へもどった。
女中が風呂を出して行ったので、湯の音がしていた。
「ほんとにすぐ帰る?」
「うん、そうしよう」
小金井はいとも簡単に言うのだが、泰然と煙草をくゆらしている。
そうなると、里津子も騒ぎ立てては悪いような気がして来た。
女中がビールとつまみものを盆にのせて入って来た。別にあいそうを言うでもなく、風呂場へ行って湯をとめ、
「ご用がありましたらお電話でお願いいたします」

と言って、また出て行った。
小金井はビールを抜いて、二つのグラスへ注ぎわけた。
「さア乾杯、それから風呂へ入ろう」
グラスを持つ里津子の手がふるえた。

小金井はたてつづけにビールを注いでは飲み、たちまち一本をあけてしまうと、
「せっかく風呂がわいてるんだから入ろうじゃないか。君、先へどう?」
そう言いながら、ネクタイをはずし、上着をぬいだ。部屋の隅の乱れ箱にある浴衣と丹前を着るつもりらしい。
「あたしお風呂へは入りません」
「じゃア僕は入るよ」
小金井が眼と鼻の先でワイシャツをぬぎ、ズボンを取るので、里津子は視線のやり場に困った。
小金井との間が恋愛らしいものに進んでからも、小金井は母や妹と一戸を構えているし、里津子は親代りの兄夫婦の家にいるので、比較的節度のある交際をつづけて来ていた。周囲から完全に遮断された一と間の中に、二人きりでいることさえ前例がないのに、里津子の眼の前で小金井が裸になるなど、破天荒な出来事だった。
だが、小金井が入浴すると言うものを、やめろと言う理由はなかった。
小金井もさすがにそこで裸にはならなかった。次の間の襖をあけると、暗い中へ入って行って、下

着を取り去る様子だった。
小金井が中廊下へ出て、浴室へ入るのを、里津子は眼をそらして見なかった。
このままで時が流れて行けば、小金井に求められるのはわかっていた。結婚と言う神聖な儀式に依ってのみ捧げられる純潔が、こんなあなぐらのような場所で、何の祝福も誓約もなく失われるのは、里津子にはがまんがならなかった。
どうしたら相手を傷つけずにこの場を逃れられるかを、里津子は気ぜわしく思いめぐらすのだが、ただ胸がさわぐだけで何の考えもうかばなかった。
湯の音をさせていた小金井が、意外に早く浴室を出て来た。浴衣をまとい、里津子の前へ来ると、
「僕は今日、君に愛情のあかしを要求するよ」
圧しつけるように言った。
里津子はすくんでいた。拒む言葉を探したが、喉が引きつって声が出ないのだ。
「さア立つんだ、何にも恐いことはない。どうせ僕らは結婚するんじゃないか。早くてもおそくても同じことなんだ。僕は君をしっかりと自分のものにしておきたい、その必要があるんだ」
小金井は里津子の腕をとって引き立てた。
「嫌、嫌よ、嫌……」
里津子はあえぐように同じ言葉をくりかえした。
「何故さ、何故、いいじゃないか」
小金井は抱きすくめ、次の間へ引き入れると、里津子を暗い中へ押し倒した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.